なければ承知の出來無い兒にして了つた。

初めの中こそ窓から庭を見るか玄關から外の景色や子供の遊びを見て居たのであるが其れが何時の間にか外に脊負ひ出す癖を覺え込んで了ふとどんなに忙しい時でも外に出なければ泣き喚いて暴れる兒にして了つた。

外に出るのも最初は御天氣の日に少し出て居たのであるが次第に其れが度重なり嵩じて來ると雨の日でも風の日でも誰かの脊中の中に丸まつて外に出た。使はれて居る召使ひが勤めが辛くて居据はらなくなつて了つた。

一年半經つと外に出る距離も段々延長されて近所だけでは滿足出來ず電車通り迄出て自動車や電車の往來を脊中の中から見て樂しむ樣になつた。

朝早く家を出ると食事と便通の時間の外は殆んど此の兒は外で暮した。其れも必ず家人か傭人の脊中の中と限られて居た。其して夜晩く歸つて來ると風呂に入り再び誰れかの脊中に負はれて眠るのである。



此んな不自然な兒にどうして此の兒はなつて了つたか?。其れは此の兒の責任では無くて誤つた愛し方をした家人の罪であつた。さて此の不幸な兒に其の次にどんな事が起つたか?。

或る非常に寒い日の夜中に往診の電話を受けた。外套の襟を立てゝ木枯しの響きを立てゝ吹き過ぎる街路に出ると凍つた道路が氷の樣に固く冷たく靴の底で鳴つた。十二時は疾くに過ぎて居たので電車通りに出ても電車は一臺も無く無人の都大路を圓タクのヘッドライトが凍つた闇を裂く樣に時々閃き過ぎる位であつた。

コッコッと歩いて居る自分の行手に一人の黑い人影がある。最夜中に歩いて會ふのは巡査の外には居ない筈であるのに今自分の行手にある人影は姿の樣子から決して巡査では無い。女の樣である、黑いネンネコで人を負つて居る。歩いて居るが非常に緩い歩き方で殆んど同じ場所を動いて居ると同樣である。四邊

には人影は愚か犬でさへ見えぬ寂靜まつた街路の中央で此んな人に會ふのが泥棒に會つたより却つて氣味が惡い位であつた。

向ふは女の足で然もノロノロと歩いて居るのか動いて居るのか解らぬ緩慢さであるから男の足の自分は直きに其の人に追ひ付いて了つた。

追ひ越す時にどんな人かと好奇心に驅られてチラリと其の人を覗いて見ると向ふでも此方をジット見たが、思ひも懸けずヒョッコリと御辭儀をされた。驚いて其の顏を見ると、話の續きの子供の母で脊に負はれて居るのが負はねば眠らぬ彼の兒であつた。其の兒は其の時母の脊の中で蒼白い顏に大きな目を開いてマヂマヂと私の顏を見て居た。傍の電燈の光りの故か母子共大變蒼白い顏に見えた。

「こんな夜中にどうしたのです?。」

と聞くと、病心らしい母親は眉を顰めて太息を吐いた。



「此の兒が夜晝構はず外に出なければ聞かなくなつて了ひました。其れも此頃では電車通りに出てこうして歩いて居なければ寢付きません。

寢付くとそつと家に歸るのですが目が覺めると又出て來なければ泣き叫んでヒステリーの樣に狂ひますので、此頃では一晩に二度も三度も出る事が御座います。」

其の後二度程夜中に往診に出て其の兒を負ふた母に會つた。三月程經つて家事の都合上か子供の健康上か知らないが湘南の方に越して行つた轉居の知らせを受け取つた。

# 近眼

其の女の兒は其の時五年十ヶ月であつたから未だ學校には行つては居なかつた。

生れつき非常に本の好きな子供であつた。御菓子より玩具より何より本が好きであつた。何か買つて貰ふ時には必ず本を買つて貰つた。買つて遺ると何度でも讀まされるので家人は閉口して了ふのであつた。併し家人が閉口する頃には大抵は覺えて了つて殆んど正確に讀むのであつた。併し勿論字を讀むのでは無くて繪で覺えて暗誦するのである。四年の終りには暗誦した畫本の片假名を拾ひ讀みして居る中にどうにか片假名だけは覺えて了つて外の本も字を辿りつゝどうにか讀む樣になつた。

其の女の兒には一人の兄があつて少女が滿四年の時、小學校一年であつたが其の兄の本を仕舞ひ迄殆んど教はらずに讀んで了つた。二の卷も兄が未だ讀まぬ中に讀んで了つた。外の子供の本を片假名の物は總べてスラスラと讀む事が出來る樣になつた。其處で家の人が讀んでやらずに濟むので大いに助かつたと喜んで居た。

其の中に今度は少女は平假名を讀み出した。家の人もしきりに聞かれるので一つには面倒臭いのと一つには餘り良く覺えるのに興味を持つて一度に教へて見ると四十八文字を忽ちの中に覺えて了つた。未だ小學校にも行かぬ中に兄を追ひ越して平假名迄覺えて了つたので時には兄が讀本等で讀み難い所に來ると少女が教えてやる事もあつた。家人も此れには苦笑したが惡い氣持はしなかつたのである。

平假名が讀める樣になると今度は讀書の範圍がズッと廣くなつた。第一兄の

毎月取つて居る少年雜誌を端から讀み出して忽ちの中に讀んで了つた。振假名を辿つて讀んで居る中によく出て來る本字や容易しい漢字も大部覺えて來た。

外の同じ年齢の子供達の樣に此の少女は外に出て遊ぶ事が殆んど無かつた。大抵は部屋の何處かに寢そべつて本を見て居た。家人も此の方が靜かで大人しい上に外に出て着物を汚したり怪我をしたりして歸つて來る心配が無いのでいゝ事にして放つて置いた。否や寧ろ此の樣な悧巧な少女を持つたと云ふ事を內心誇りとして却つて此の少女に讀書を奬勵する樣な傾きさへあつた。從つて少女は讀む者が無くなると今度は父の取つて居る大人の雜誌や母の取つて居る婦人雜誌迄も蠶食し初めた。初めは容易しい子供向きの記事や漫畫ばかり讀んで居たが次第に難かしい小說や廣告迄も讀み出して子供の知る必要の無い事迄質問する樣になつて來たので此れには此の少女を可成り得意に思つて居た父母も驚いて雜誌を取り上げて隱したりして見たが何にもならなかつた。少女は直き



に探し出して又一日本を相手に家の中で暮して了ふのであつた。

此んな生活が此の年齢の少女にとつて肉體的にも精神的にも決していゝ影響を齎す筈は無く、次第に少女は顏面が蒼白となり年齢に比較して恐ろしく早熟となり歪んだ發育を遂げる危險に陷つた。

其處で今度は父母も眞劍に少女の陷りつゝある危險を考へて絕對に雜誌を少女に渡さないばかりか家人も雜誌を取る事を一時中止する事に一決した。

讀む物の無くなつた少女は實に詰らなそうに日を暮さなければならなかつた外に出ても日が眩しそうに片隅に懷手をして外の子供の遊ぶのを見て居た。家に歸つて來ても手持沙汰に味氣無い顏をして居るのであつた。父母に取つては少女の樣子が洵に寂しげに哀れつぽく思はれるのであるがどうにも仕方が無かつた。

其の中に父が其の少女に就いて妙な徵候を發見した。其れは物を必要以上に

目に近づけて見ることや少し遠くにある物がハッキリと見えぬ事や明るい所に出ると如何にも眩しそうに目をショボショボさせて細くする事等であつた。

時々目の痛みを訴へる樣になつたので父は少女を連れて或る日眼科の醫者を訪ふて診て貰ふと、少女は餘り細い字を暗い所で一心に見た爲めに兩側共、可成り强度の近視眼になつて了つて居たのであつた。



## 嫉妬

二年二ヶ月になる男の子が近頃非常に神經質になつて事々に飽き易く怒り易く泣き易く焦れたり眠り付きが惡かつたり起きても氣嫌が甚だしく惡い。何處か惡い所があるのでは無いかと云つて連れて來た患者があつた。

診察して見たが何處も惡い所は無い。今迄は神經質と云ふ程の事は無かつたと云ふのである。こうなり初めたのは此處二月ばかりの中で神經質になり初めた原因も何であるか全く思ひ當らぬと云ふ。

兎も角樣子を見る事にして其の日は歸した。其の後連れて來るかと思つて居ると其れ切り來なかつた。此方も何時とは無しに忘れて了つた。

一月程經つて其の患者が又來た。母親の手に新らしく生れた男の子が抱かれて居た。

「其の後御伺ひしようと思つて居りましたのですが丁度直ぐ此の兒が生れたものですから遂、その儘になつて了つて相濟みませんでした。其の後樣子を見て居りますのにどうも以前と同じ樣に氣分がムラで仕方が御座いません。此頃は却つて其れが以前より酷くなつて來た樣に思はれますのですが如何なものでせうか？」と母親が云つた。

再び診察をして見るのに肉體的に何れにも病氣は發見出來無かつた。然し此の小兒が斯く神經質になつた原因と云ふ物は立派に發見出來た。其れは新らしく生れ出た子供に對して抱いた小さき兒の嫉妬心に外ならなかつた。今迄兩親や家人の限り無い愛を一身に引き受けて育つた子供が次の子の姙娠、分娩及び產褥に依つて最も親しかつた母を奪はれて了つた爲めの小さな不安が、自分から移り去つた愛の空虛さを朧ろげに感じて起す嫉妬心であつた。

其の考へを家人に告げて小さき心に不安を抱かしめざる樣に話した。



「此んな小さな子に嫉妬なんてあるものでせうか？」若い母は半信半疑らしく小首を傾けて聞いて居た。

其の後は又暫らく來なかつた。

一月ばかり經つと又遺つて來た。今度は生れた方の赤ッ坊を横抱きにして慌てゝ遺つて來たのである。神經質の兒は連れて來なかつた。樣子を訊くとたつた今、其の兒が此の乳兒の寢て居る所をベットの上から引き擦り落したのだそうである。

其の後神經質の小兒は、いゝと云ふ程でも無かつたが特別酷くなると云ふ事も無く、時々は癇癪を起し焦れ怒り泣き叫び暴れる事もあつた。が又直きに納つて氣嫌よく遊ぶ事もあつた。母も氣にはして居るものゝ乳兒の方がどうしても手が掛るので其の方に掛り切りになる事が多かつた。

母乳が少し不足なので混合榮養であつた。今日丁度三時が人工乳なので作つ

て居ると其の兄のお三時が遅れた爲めに怒り出して母がチョット手を離した暇にイキナリ乳兒のベットから蒲團ごと乳兒を引き擦り落したのだそうである。火の付いた様に泣き出した乳兒の聲に驚いて母親が見ると兄が乳兒を猶擲らうとして居る所であつた。漸く兒を押へて乳兒の何處か損めはしなかつたかと急いで連れて上つたのです。と其の母親は餘程急いで來たと見えて未だセイセイと息をはずませ乍ら心配そうに語つた。母の腕の中で末だ子供は猛烈に泣き續けて居た。

幸ひな事に何處も損傷した所は無かつた。乳兒は驚愕の爲めに泣き嘆いて居るのであつた。

「子供の嫉妬の恐しさを今日初めて知りました。これから猶氣をつけませう。」と若い母親はシミジミと云つた。歸る頃には乳兒は母の腕の中でスヤスヤと罪の無い眠りに陷ちて居た。



玄關に送つて出ると扉の外に今亂暴を働いた兄が女中に手を引かれて此れもあどけ無い顏をして立つて居た。

「お坊ちやんがどうしても赤ちやんの所に行くと仰言るものですから參りました。御可哀想にヤッパリ心配になると見えますね。」と女中が云つた。子供の顏には再び亂暴を働きそうな影は微塵も無く、母の腕に抱かれた乳兒をボンヤリと見上げて居るだけであつた。

母と子等と女中は一緒に歸つて行つた。歸つて行く子供の後ろ姿に感じ易い微妙な子供の心の動きを自分は暫く考へざるを得なかつた。

# 現　滅

看板を上げれば直ぐ其の日から患者は續々と詰め掛けるものと蟲のいいそして人のいい過信をして開業した若い醫者のF君は開業して見ると案に相違して犬の子一匹轉がり込まぬと云ふ不景氣さに呆れ返つて毎日ゴロゴロと河岸の鮪の様に寢てばかり居て勿體無い日を暮して居た。

初めの中こそ朝起きると今日こそはと大いなる期待を掛けて待つて居るのに十時十一時と徒らに時が過ぎて午となればもう來ないと見極めが附いて、「今日も又來なかつたか。」と張り詰めた氣も急に拔けてガッカリとして了ふのであつた。

こう云ふ日が二日過ぎ三日續きする中に世の味氣無さがックヅクと身に泌みて今更乍ら世渡りの難かしさがヒシヒシとして胸に應へる様であつた。さればこそ



最初に來た患者こそ實に嬉しき限りにて待ちに待つた遠來の珍客御座んなれとばかり家中大騒動で、

「患者さん、患者さん！」と聲を潜め家人を激勵して大童、一診一打も忽にせざる鄭重なる診察振りの上、言葉も丁寧、事も細々と療法を説明した揚句の果てに、調劑を待つ間に紅茶を入れて患者に出す程の勉強振りであつた。流石に此れは患者も薄氣味惡かつたと見えて手を觸れなかつた。

「御幾らで御座いますか？」と問はれて幾ら幾らと云つて患者から貰ふのがどうにも氣の毒でし得ずに初診料も取らず醫師會規定の藥價だけをやうやうに貰ふのが宛で不當な利得を强奪する様な氣さへしてやつとの事であつた。此の話はF君が斯くの如き苦闘時代の話である。

或る日、看板のペンキの臭ひが未だ拔け切らぬF君の醫院の門を叩いた患者があつた。往診の依頼である。

「占めた！」とばかり、何か働く仕事さへあれば、つまり患者さへ來れば實に速かに間違ひ無く親切に安く診てやらうと固く決心したものの毎日宛の無い脾肉の嘆を洩らして居た際の事であるから、物をも云はず速射砲の如きスピードで支度をすると家人にも、

「往診、往診！」と誇らしく告げて久し振りに晴れ晴れした顏をして鞄を小脇に門を出た。

患家に行つて見ると餘りいい家では無い。併しどんな努力をしても患者の苦痛と病患を除き去つてやらうと大抱負を持つて居るF君の事であるから其んな事は問題では無い。況んや醫は仁術である。

惡いのは此の家の主人であつた。F君徐ろに病歷を取り診察するに病氣は氣管枝加答兒である。大した病氣では無い。往診しなければならない程の病狀でも無い。歩いて來たつて決して大事無い程度である。併し案外神經質の爲めに



身體を大切にして居るのかも知れない。手當の事等話して居る中に、主人が、

「オイ。お前も昨夜頭痛がするなんて云つてたぢやないか。先生の御出での序でに診て戴け。」と細君に向つて云つた。

「妾のは大した事は無いのですよ、チョット風邪を引いたらしいのですが。でも折角御出でになつた序でですから診て戴きませうか？」と云ふので診察すると鼻加答兒と安魏那である。此れも大した事は無い。併し藥だけは與へる事にした。

ソロソロ引き上げ樣とすると今度は細君が、主人に向つて、

「子供が二三日腸を惡くして下つて居るのですが、序でに診て戴きませうか？」と相談した。

「診て戴け、診て戴け。序での事だ。其れに子供の病氣は放つて置くと大變な事になる。」と主人が應揚に頷いた。

F君は又其の子供を見させられた。此れも急性腸加答兒であつたが放つて置いても癒る程の輕いものであつた。

隣りの部屋でゴホンゴホンと咳嗽をする音が響いた。F君が聞耳を立てる迄も無く主人が、

「そうそう。お祖母さんも診て置いて戴きませう。此れは喘息なんで始終ゼロゼロ云つて居ますが何かいい處方でもないものでせうか？」と云つた。

「ない事もありませんが、どんな具合のですか一度拜見して見ませうか？」とF君は云つた。心の中では「此れは今日は仲々の大漁だつたぞ。一度に此んなに患者を殖やすとは凄いもんだ。」と狸の皮算用をして北叟笑んで居た。其處で又其の老人を診た。

「どうでせう。何かいい藥があつたら戴き度いもんですが。」と主人が云つた。

「よろしいです。調合して置きませう。」とF君は受け合つた。



愈〻歸らうとすると細君が、

「先生の御忙しい所を御引き止めして甚だ申し譯けありませんが宅の女中が若い癖に、神經痛だとか云つて困つて居りますのですが御急ぎでなかつたら診てやつて下さいまし。そして此れにも御藥を御調合願ひ度いと存じますが。」と云つた。

「今日は何たる好き日ぞや。」とF君は益々有頂天になつて女中迄診察した。此れも醫者に掛る程の事ではない。其れにしても餘程氣を附ける家庭だ。病氣も此れ位の中から氣を附けたら間違ひもあるまい。F君は此の家の人達の心掛けのいい事に感心した。

見渡す所、廣い家でもない。もう外に家人も居ない樣だ。從つて病人もあるまい。一家中診て了つた解だ。

愈〻さよならだ。とF君は考へてシビレの切れた足を延ばして立ち上つた。

「一石五鳥。」F君は歸り乍ら口の中で其んな言葉を呟いた。非道く御氣嫌のいい顔をして歸つて來た。天も此の佳き日に祝福あれ。歸つて來ると、

「御歸り、御歸り！」と云ふので又一家中物珍らしく大騒ぎしてF君を迎へた。洋服も脱がずに藥を作り初めた。何しろ五人分である。大きい瓶が五本に小さい瓶が一本。散藥の袋が五つ。後にも先きにも此んなに一緒に藥を作つた事は嘗てない事だ。素敵だ。

F君は出來上つた五本の投藥瓶をズラリと並べて見て敵の首級を五つも擧げた時の樣な歡喜と興奮に心をときめかせつつ暫くの間はウットリと藥局の中で其れに見惚れて居た。

斯くの如くしてF君はいい顧客を一軒獲得した。其の患家に毎日足を運んで熱心に治療した。其の時の病氣は直ぐ癒つたが其の家の人達は弱くて始終病氣をした。病氣をする度びに呼ばれて往診して藥を與へた。其の病氣の孰れもが



放置して置いても自然に治癒する程度の極く輕いものばかりである。輕いのに大袈裟に呼び附けられるのであつた。かるが故にいい患者で患者達は自體が虚弱と云ふよりは神經質なんだらうとF君は考へて居た。

勘定は此んなに度々、此んなに大勢で掛るのであるから勿論一一拂ひはしなかつた。

「面倒ですから一度に御拂ひしますから。」と先方では云つて居た。併し其の月末になつても拂ひに來ない所を見ると引き續き掛つて居る患者があるので其れが濟んでから一度に拂ふと云ふのかも知れなかつた。只其の一度が盆を指すのか節期を云ふのか不明であつた。事實其の家では毎月末から翌月に掛けて一人か二人掛つて居ない事はなかつたのである。從つてF君の方からも無論治療費を請求しなかつた。請求するのが如何にも卑しい行ひの樣にも思はれるし又先方を侮辱する樣な氣もしたからである。

F君の住んで居る町では醫者の親睦會があつて毎月一回宛寄り合つて會食をする事になつて居た。「談笑の内に智識を交換するを以つて目的と爲す。」と其の會則に書いてあつた。F君も患者こそ少いが毎月其の會食には出席し種々開業術を先輩開業醫からも學び、流行醫からも流行の秘訣を聞こうと努めて居たのである。

或る夜の會で偶然、F君の始終見て居る彼の患者の評さが出た。F君は初めは誰の事やら解らずに聞いて居たが段々聞いて居る中に其れが一家を擧げて掛つて居る彼の家族の事である事が解つた。

其れに依ると實に横着な一家で大した病氣でもないのに醫者を自宅に呼び寄せて豪勢に構へ込み散々掛つて出來るだけ永く出來るだけ澤山勘定を溜めた揚句請求しても知らぬ顔の半兵衛を決め込み際々取りに遣ると言を左右にして拂はうとはしない。其の内に又別に開業する醫者があると其處に行つて同じ手段



で治療を受ける。何とかしてやり度いが此方は醫者で普通の商人の樣に催促も出來ないし催促しても出す相手ではない實に横着な患者で箸にも棒にも掛つたものではない。新らしく開業した人は注意しなければならない。と云ふのである

「F君等も注意しないと酷い目に會ひますよ。」と老人の醫者が云つて笑つた。F君はドキリとした。「實は今盛に家に來て居るのです。」とは云へなくなつて了つた。如何にも一生懸命にいい患者だと思つてセッセと通つて治療してやつて居る自分が宛で馬鹿か阿呆の樣に思はれてならなかつた。であるから此の際、「もうやられたんですよ。」と輕く云ふ事が出來なかつた。其れにしても彼の一家の爲めに費した藥價だけでも相當多額なものである。

F君は其の後の醫者達の突飛な面白い話しも耳に入らず湯氣の立つ美味しい御馳走も味が解らなかつた。心の中は始終彼の患者の事で一杯であつた。

會が終つて皆と別れて一人で歸る路すがら先刻彼の醫者の云つた事は本當で

は無いらしく思はれて來た。どうも變だ。あんなに自分を信頼して居る樣に見える患者が自分を欺いて居るのだとは思はれない。自分も一生懸命に治療してやつて居るでは無いか？其の自分を裏切る事はよもあるまい。話しは少し大きい事を云ふけれども彼の主人だつてそんなに惡い人間の樣には思はれない。先刻の醫者の云つた事の方が間違つて居るに違ひない。吃度そうだ。其れに違ひない。他の醫者はどうかは知らない。が自分だけは違ふ。自分はそうは思はない。自分は彼を信じてやらう。向うだつて此の自分の心持の解らない筈はない。

F君は道々こう考へて幾らか心が安まつた。

丁度其の月末は其の患者の家に病人が途切れたので書生に今迄の請求書を持たして遣つて見た。心の中でF君は其の結果に大きな期待を掛けて居た。若し拂う樣だつたら此の次の醫者の會の時に此の事實を報告し自分が他の醫者と違う所を示し同時に彼の患者の名譽の爲めに辯解して置いてやらう。と考へて居た。



書生は歸つて來た。「孰れ又伺ひますから。」と云ふ挨拶だけを持つて歸つた。

「相當多額な金額だからそうもあらう。」とF君は猶も善意に解釋して居た。

一日待ち二日待つたが其の家からは何の音沙汰も無かつた。五日經ち十日過ぎ翌月ももう半ばに達しようとして居るのに何の挨拶もない所を見ると流石に人のいいF君もそう何時迄も其の患者を信用して居る譯にも行かなくなつた。

「やられたかな？」と半ば疑ひつつも猶其の月の終り迄待つて見た。が其の月末も空しく過ぎては幾らか殘つて居たF君の期待も全く潰滅せざるを得なかつた

其れにしても請求書を出してからは其の患家からは一度も迎ひが來なかつた。それ迄あんなに迎ひに來て居たのにどうした事であらうと幾らか心配にもなつた。其の月も暮れて翌月、往診があつてF君は其の家の近所迄行つた。其の歸り道、其の患者の家の前迄行つて見ると朽ち掛けた門が固く閉ざされて、「かしや」と書いた札が一枚斜に張られて居た。

# 辨當泥棒

十月の初の事、朝夕の冷氣が身に泌みて身體も心も引き締まる頃、暑中休暇で遊びに慣れた氣分も漸く脱けて學生達も愈〻眞劍に勉强に實が入り初めて居た。

其の頃、學生の辨當が頻々と盗まれると云ふ事件が起つた。盗まれるのは大抵講堂での休み時間でお午を控へて血氣盛りの若者が辨當を盗まれるのは實際打擊であつた。學校に食堂もある事はあるのであるが學生の貧弱な豫算を立てた財嚢には此の不意の臨時費は決して輕い負擔ではなかつた。隨分注意深く氣を附けて居ても直きに誰れかがやられた。其れも毎日と云ふのではなく二日續くと五日休んだり一週間安全だと思ふと一日隔に盗まれたりした。仲には何度もやられて辨當箱を月に幾つも買ふ學生も居た。盗まれた辨當箱は大抵は出な



かつた。一度解剖教室の横の塵芥箱の中からと、も一度は實驗動物飼育場の傍の便所の後ろから出て來た位であつた、幾ら注意しても盗まれるし學校側から警察の方にも屆出てはあるが盗まれる品が大した物ではないのでまアお互ひに氣を付けるより外に仕方が無からうと云ふ事になつて了つた。

剽輕者の學生の一人は自分の辨當箱の中に「大馬鹿泥棒野郎」と書いた紙を入れて適當な重さにしてわざと盗まれそうな机の上に毎日御苦勞にも置いて見たが不思議に其れは盗まれなかつた。又一度盗まれた學生の一人は本當の辨當の上に死に到らぬ分量の毒物でも塗つて盗ませてやり度いと眞面目に考へて居たが、此れは併し實際には行なはなかつた。

學生が休み時間を利用して、「辨當泥棒豫防並びに捕縛案」をよりより相談したが大して名案も浮ばなかつた。學生達は極度に此の見えざる敵を憎んだ。

折も折、十一月の末、此の泥棒が一學生の手で捕まつた。

泥棒を捕まへた學生は其の日、學校の圖書館で參考書を借りて解剖の勉强をして居た。もう直き一區切りになるので丁度午であつたが辨當の事もウッカリ忘れて居た。

すると自分の丁度前に來て座つた男が辨當を廣げて食べ出した。何の氣無しに其の男の辨當箱を見ると何となく見覺えがある。其の辨當箱を包んだ小風呂敷の鼠色の模樣が自分の持つて來るのと同じ模樣とは似た物を持つて居る人もあるものだ。其のアルミニュームの蓋の引込み具合も實に自分のと似た辨當箱があるものだ。其の辨當箱に附いて居る飯を運びつつある箸も角の端の方が黑くなつて居る所など實に懷しい心持だ。ウッカリ見て居た學生はハッと氣が附いた。見覺えのある段ではない。此れは俺の辨當ぢやないか?。

いきなり立ち上らうとしたが此の辨當を食ひつつある若い男の落ち附き具合はどうであらう。傍に新聞を引き寄せて旨そうに極めて自然に辨當箱にも箸に



も十年一日の如く愛用して居る如き親しみを見せて悠々と口に運びつつある樣子はどうしても人の物を盜んで食つて居るとは見えなかつた。餘り其の男が悠々と少しの不自然さも無く自分の物を食つて居る如く食ひつつあるので、盜まれた學生も「非常に似ては居るが自分の辨當ではなくて彼の男の辨當かな。」と錯覺を起させた位であつた。併し見直すとどうしても此れ程自分の辨當箱に似た物が他にあらうとは思はれない。殊に動かすべからざる證據は飯の入れ具合と端にある鹽鮭の切身である。其の學生は餘程鹽鮭が好きであつたと見えて下宿の小母さんに賴んで辨當の御菜は殆んど毎日鹽鮭を入れて貰つた。小母さんの方も此れだと世話の入らない上に大に經濟的でもあるので三日に上げず此の御菜を用ひて居た。更に此の證據を裏書きする物は御飯の方に所々落した醬油の痕は自分が好んで掛けて貰ふ小母さんの落し具合に間違ひはない。

愈〻此の男が泥棒と決つた。併し mit der allergrössten Sorgfalt（念には念

を入れよ）である。見ればそんなに強そうな顏もして居ないが此んな大それた事をする男の事だから油斷はならない。ポケットの中に何を秘して居るか知れたものではない。其れともう一つは實際に自分の辨當箱があるかないか確めてから捕へても遲くはない。

こう考へたので其の學生は何氣なくソット立ち上つて圖書館を出た。出ると大急ぎで自分の教室に走り込んで見ると果して自分の辨當箱はなかつた。勿論ない筈で今迄目の前に見て來た辨當箱だから間違ふ筈はない。もう確實に彼の男が辨當泥棒と決つた。其の學生は丁度午休みの時間で其處に居た同級生に辨當泥棒が今圖書館に居て自分の辨當を食ひつつある事を話すと何しろ血の氣の多い學生の事ではあり中には前に盗まれた學生も混つて居て恨みは一方ではなし忽ち全部が塊まつて圖書館の方に驅け出した。

併し相手は泥棒の事であるからどんな抵抗をしまいものでもない。又逃げら



れたり血氣に速つて怪我をさせても惡いと云ふので其の中柔道二段とか初段とか云ふ屈强なのが三四人中に這入つて其の外は二つの出口を塞いで逃路を絶つ事に一決した。物が大きいだけに此れの方が鼠を取るより兎を狩るよりよつぽど面白かつた。面白いだけに皆ドキドキと胸が鳴つて流石に興奮して居ない學生は一人もない。

大きな强そうな學生が四人何氣ない風を裝つて圖書館の中に這入つて行つた。外では他の學生達が息を殺して扉の蔭から中の樣子を窺つて居る。

中では泥棒は未だ悠々と鹽鮭の辨當を食べて居た。何食はぬ顏で食べて居る。學生の二人が兩側から側に寄つて物も云はず兩手をギュッと握んで了つた。泥棒は御飯を呑み掛けた時なので目を白黑させた。手ブラの一人が勢ひが餘つてゴツンと一發泥棒の頭に拳が飛んで了つた。泥棒が辛い顏をした。尤も鹽鮭を食べたばかりだから無理もない。外の連中が大丈夫と決まると押へ切れ

ぬ喚聲を上げて圖書館の中に崩れ込んだ。事務の人や靜かに書物を見て居た連中が驚いて了つた。泥棒は右手に角の箸を持つた儘、學生達に取り卷かれて事務所の中に連れて行かれた。途中で二つ三つ鐵拳を食つて小衝き廻された樣子である。中には後ろの方で「御用！御用！」等と怒鳴つて居る者もあつた。事務所で調べて見ると同じ大學の制服制帽を被ては居るが此れも盗んだ品で學校とは何の關係もない男であつた。今迄數多の辨當を盗んだ事を自白したが制服制帽の爲めに誰れも怪しむ者もなく解らずに居た。盗んだ辨當は大抵學校内の何處かで食つて歸つて行つたのだつた。併し惡い事は出來ないものだ。盗んだ學生の目の前で鹽鮭等食つた爲めに運が盡きて捕へられて了つた。

一時間程經つと警官に伴はれて若い泥棒は薄寒さうな格構をして鐵門の外に消えて行つた。右手に先刻の辨當箱をブランブランと下げて行つた。其の辨當箱は證據物件として再び其の學生の手には返らなかつた。



## 隣り同志

非常に神經質な親が居た。兩親共神經質で餘りに神經質な爲めに育兒の上に於いて時々意見の衝突を來して爭ひを惹き起す事があつた。

其の子供と云ふのが女が一人、男が一人の二人姉弟であつたが親達が斯く神經質に育て上げたにも拘らず、或ひは斯く神經質に育て上げたが爲めに此の上無しの虚弱兒であつた。

姉は小學校の一年に上つたばかりであるが其の發育は標準兒童より一年以上も遲れて居て裸體になると肋骨が全部勘定出來る程の痩せ方であつた。毎日牛乳を一合と肝油ドロップスを缺かさずに呑んでは居るがどうしても肥る事が出來なかつた。加ふるに風邪を引き易くて一年の大半は濕布と吸入とで日を送つて居た。

弟は三歳になるが滿一年八ヶ月で座る事は出來るが未だに匐ふ事も起立する事も出來なかつた。匐ふ力も起つ力も無いのであつた。こう云ふ母親にはよくある例で母乳が出なかつた。其の重な食餌は生れてからズッと粉乳であつて未だに御飯は勿論、普通の御粥さへ口にした事は無かつた。時々重湯を與へられるが此れとても翌日の便の性狀を父母が調べて色でも惡からうものなら直ぐ止めさせられた。そして粉乳の濃度や量迄減らされるので、身體よりも頭腦が先きに發達して居る此の兒は重湯と見ると危ながつて呑まなくなつて了つた。其れに重湯よりも粉乳の方が旨いので猶更であつた。

家には粉乳を計る秤が特別に茶簞笥の前に備へつけられて時間が來ると粉乳を計り添加糖としては滋養糖を計りラロサンを加へ時間を決めて煮沸し、煮沸後何分で與へると云ふ事迄一分一秒の違ひも無くキッチリと決められて居るのであつた。斯くの如く此の上も無い注意が拂はれて居るにも拘らず此の兒は極



端に胃腸が弱かつた。子供自身も口は奇麗であるのにホンのチョッとした原因でよくお腹を毀すのであつた。すると忽ち必要以上に粉乳の量は減ぜられ忽ちの中に折角肥つた體重が一度に減少する。

家の中には大抵の整腸健胃劑、祛痰鎭咳劑、吸入濕布藥等が下手な藥局を負かす程茶簞笥の中にズラリと並べられてあつた。

此の親達の治療に關する藥劑と手當の種類を知つて居る事は驚くばかりで最近出た藥は元より古きは馬肉、豆腐等の濕布や漢法の煎藥に到る迄、醫者の知らぬ物を立板に水を流す如くに述べるのであつた。

其れが又親達の誇りで、

「家の子供達は他所さんの子供と違つて食餌は一一秤りに掛けて與へて居るのですから、何でも彼んでも食べられる胃腸とは胃腸の出來が少し違ふので其れだけ御上品に出來て居る。從つて發育こそ劣るけれども間違ひが無い。身體

の發育は劣つても頭腦の働きは同じ御年配の子供達とは比較にならない位進んで居ます。」と云ふ事を非常な誇りとして居た。

此の隣りに住んで居る家族は此れは又隣り同志とは云ひながら性格に於いては全く正反對の極端な放任主義で常々隣りの神經質の夫人とはウマが合はず時には口に出してさへ、

「お隣りの様にイヂイヂ子供に飢じい思ひをさせて置くなんて全く馬鹿げ切つて居て御話しにならない。食べ度い物は食べ度いだけ與へるがよいので與へないから子供が無闇にいぢけてひねこびて、まるで人間の干物の様になつて了ふのだ。御夫婦が干物で子供が干物でまるで乾物屋に行つた見たいだ。」と蔭口を云ふのであつた。

此の家も丁度神經質の家と同い年の少女が學校も年も組も同じ姉と其の下が四つになる妹が一人居た。



姉は八歳であるが親が其んな蔭口を叩くだけあつて實に立派な發育振りで標準よりはズッと超過した骨格肉付は其の母親に似て堂々たるものがあり食餌に好き嫌ひを云つた例が無いのであつた。今迄に度々病氣はするが何時も醫者に掛ける迄行かずに自然に癒つて了ふので親達も病氣になつても心配した例しが無い。併し學校の成績はお隣の姉とは比較にならない位惡かつた。

其の妹も滿で云へば二年二ヶ月であるが此れも姉に似て立派な體格を持つて居た。此の子の食慾も感心する位旺盛なもので御飯を時々四回食べる外に間食も食べる物がありさへすればあるだけは食べて了ふのである。食餌の範圍等制限した事は無く大人の食べる物は何でも食べて居たのであつた。

神經質の母親は我子の頭腦のいゝ事を自慢し隣りの母親の無茶な食事の與へ方を非難して居た。一方放任主義の母親は又我が兒の健康を誇り隣りの母親の極端な神經質を嘲つて居た。

神經質の母親は時には隣りの母親に、

「御氣をつけなければ今に何か起りますから何卒食餌を御子様にだけはもう少し御注意下さい。」と賴み込む様に話す事もあつたが開放的な母親は家に歸つてから其の夫に、

「隣りの奥さんが妾に餘計な御せつかいを云つたけれど大きな御世話ぢやないか。人の家の子を心配するよりは自分の家の兒が干乾にならない様に氣を附けた方がいい。彼の子達はシネシネして影が薄くて二人共とても育たない様な氣がするよ。」と嘲笑した。

或る秋の半ばに、神經質を嘲笑した家の小さい兒が柿を二つ食べて疫痢になつて一晩で死んで了つた。

此の事を知つた隣りの神經質の母親は我が事の様に心に強いショックを受けた。ショックを受けると同時に自分の豫言の明確に的中した喜びと常日頃自分



を馬鹿か氣狂ひの様に嘲笑して居た隣りの奥さんに對する「ソレ、見ろ、云はない事ぢやない。」と云ふ小氣味好さに似た感情で有頂天になつて居たのを隱す事は出來ない。其の日は神經質の母親は主人が歸るのを待ち遠しくて仕方がなかつた。早く此の驚くべきニュースを主人に話し併せて自分の豫言の正確に的中した偉さと自分達のして居る育兒の遣方こそ必ず間違ひの無い正しいものであると云ふ證明をしたかつたのである。神經質な主人が歸ると神經質な夫人は待ち切れずに玄關で主人が靴を脱いで居る間にあらましの話しを話してやつと肩の重荷を下した様な氣がした。

其の後幾何も無く子供を失くした家族は此の家を引き拂つて越して行つて了つた。後には遊び友達の居なくなつた羸弱な姉妹が日蔭の花の様に細々と寂しそうに家の四邊で遊んで居た。

# 生死不二

禪をする親子があつた。

子が喉頭結核に罹患して入院した。二十三歳で喉頭を犯される前に既に肺の方にも可成りの程度の結核變化が起つて居た。

或る時、患者の父が受持の醫者を訪ねて訊いた。

「息子の病氣は癒るものでせうか？」

「癒らないと云ふ事もありませんが先づ非常に難かしいと見なければなりません。」と醫者は答へた。

「私は醫學的の智識がないのですが實際の所助かるものか助からぬものかハッキリと今日は仰言つて戴き度いのですが。」



受持の醫者は此處で鳥渡當惑した。暫くの間何と返事をしていいか考へて居た。助かるとは醫者自身も思つては居ない。助からぬと云ふのは子の父に對して餘りに慘酷な樣な氣がする。と云つて助かると云へば嘘になる。かうしてハッキリした答へを要求されると醫者としてもどう云つていいか解らなかつた。併し相手は患者の實父である。其の父がかう眞劍に聞くのであるから却つて嘘僞りを云ふよりは眞實を告げて置いた方がよからうと思つたので、

「御氣の毒ですがもう恐らくは駄目でせう。輕快する事があれば幸せです。後は運を天に任せて治療する外はありません。」と答へた。患者の父は落ち付いて、

「イヤ有難う御座いました。今後共、出來るだけの事は御願ひ致します。」と叮嚀に禮をして應接室を出て行つた。

醫者は注射の時間なので其の足で其の患者の病室を訪れると父親が患者に向

つて何か話して居た。醫者は注射を後にしようとして部屋を出掛ると父親が呼び止めた。

「どうぞ先生、御遠慮なく。」

「注射ですが少し時間を延ばしても差し支へないのです。」

「いや、結構です。どうぞなすつて下さい。」

醫者は其處で注射を濟ました後、其の部屋を出ようとすると父親が、

「今、丁度息子に話して居た所ですが先生が御出でになつた時の方が却つて都合がいい。御迷惑でも鳥渡の間立ち合つて戴いて話す事だけ話して了ひ度いと思ひます。」と云つた。

醫者が椅子に腰を下すと患者の父親も椅子の一つに畏つて腰かけた。

「今話して居た通りお前の病氣は到底助からぬと見なければならない。先刻先生にも御伺ひしたのだが萬一助かればお前の仕合せと思はねばならぬ。」



父は平氣でこう子に云つた。子は落ち付いて聞いて居た。傍に居た醫者が驚いて慌てた。

「助からぬと極れば今から其れだけの覺悟はして置いて貰ひ度い。其の場に臨んで見苦しい慌て方をして貰ひ度くない。私はお前に嘘を云ふ氣にはなれない。又最後に臨んで眞實も告げずに覺悟も決めずに死なし度くない。だからハッキリと此れだけはお前に知らして置く。充分に心を落ち付けて靜かに死を待つがよい。」父親はこう云ひ終ると靜かに醫者の方を向いて云つた

「先生有難う御座いました。此れで息子も安心立命して死を迎へる事が出來ませう。」其れでなくとも此の父親の病人に向つて云つた異常な宣告にスッカリ度膽を拔かれて居た醫者は益々自己の立場も忘れて了つて返事も滿足にせずに部屋を出た。何かしら普通の患者と非常に異つた感じを受けた。殊に患者に對しては一大禁句の「死ぬ。」と云ふ言葉を平氣で口にし剩へ我が子に向つて彼の

大膽な宣告を普通の挨拶を述べる樣に、又其の宣告を受け取つて顏色一つ變へず眉一つ動かさずに聞いて居る子と親の平靜な態度に强く魂の底迄搖り動かされる樣な感銘を受けたのであつた。

喉頭に物が浸みて痛んで食物も咽喉に這入らなかつた。聲帶が犯されて嗄聲を發し聲も出なくなつて了つた。咳嗽が相當强く出て喉頭の疼痛もさぞやと察せられたが患者はジッと忍んで一度も痛みを自分から訴へる事はなかつた。

追々に全身衰弱が强く成つて餘命幾何も殘す所なきかに見えた。此の樣に重篤な狀態に陷つた患者は或る日枕頭の父に自分を起して呉れと賴んだ。聲が出ないので枕元に硯箱を置いて筆で書き示したのである。

既に助かる見込みも絶え今は命且夕に迫つて居る際なので父親も云はれる通りベットの上にソッと抱き起してやると息子は靜かに其處に座禪を組んだ。

其の姿には既に己に死の來らん事を豫知して大悟して死を迎へんとする聖者



の悟さへ見えたのであつた。

「何か云ひ殘す事はないか?」と父親が息子の耳元で云ひ乍ら筆を出すと、患者は此れを靜かに受け取つて半紙の上に、

「生死不二」と書いて筆を返した。

患者は數時間の座禪の後に其の夜の明け方、何時逝けるものとも解らぬ位靜かに座禪の儘で死んで居た。

# 足

三十九歳の男子で右足の疼痛を訴へて來院した患者があつた。

二週間程前から右の足が痛み出して二三日前から堪へられない程痛む。同時に痛む足が氷の中に漬けてある樣に冷え切つて了ふ。歩行が自由に出來なくて二三丁の道を度々休まなければ歩けない。と云ふのが大體の主訴であつた。

原因となるべき事を訊ねて見たが一月程前に轉んで右足の拇指を痛めたが其の他に原因らしい原因は考へられないと云つた。

右拇指頭に小さな暗紫色斑がある。其の部は多少の硬結があるが腫脹はない壓迫すれば輕微の疼痛の增大を訴へる。疼痛は壓迫の如何に拘らず常に存し、時々耐え得られざる激痛を來す。慎重なる診察の後に動脈硬化性特發脱疽の診斷が下された。

現在右拇指頭だけであるから速時切斷を宣告された。が患者は脫疽に對して少しの豫備知識もなかつた爲めに切斷を拒否した。切斷を拒否した理由は外にもある。其れは第一に此の患者は貧しい印刷工である爲めに手術費がない事。第二に無敎育の爲めに脫疽の如何に恐るべきかを知らず高が足の指の先の痛むだけで足を一本切斷して了ふ理由の了解し難かつた事。足を切斷すると云ふ事に對する恐怖心と其の結果として片輪者になると云ふ悲哀。切斷後職業に從事する時の不便等である。

其の日患者は又よく考へてからと云ふ事で歸つて行つた。

三日經つと又其の患者が見えた。色々考へて見たがどうしても切る決心が未だ付き兼ねるが切斷以外の事ならどんな事でも我慢するから何とかして癒して貰へまいかと云ふ事である。

疼痛は其の後益々激しく時には氣を失ふ程の痛みが來る事もあるが患者は良

く耐へて未だ鎮痛劑の注射はして居なかつた。二三日でこう變るかと思はれる程ゲッソリと憔悴して如何に其の疼痛の激しいかを物語つて居る。

趾頭の暗青小斑點は第二趾にも及んで居る。どうしても切斷手術が必要である。其の事が告げられた時、急に患者の顏面は蒼白になつて殆んど卒倒しそうになつた。其れは切斷の言葉を恐怖する餘り起つたのではなくて外の人には想像も出來ない疼痛の爲めであつた。

患者は患足を押へて齒を食ひ縛り顏面は蒼白となり前額部に冷汗を滲ませ顏面筋は悉く緊張し切つて其の苦悶は見る者をして目を蔽はしむる物があつた。鎮痛劑が一筒注射された。

漸く患者が死ぬばかりの苦悶から開放された時、醫者は患者の經濟狀態を察して施療病院に世話をしてやる事に相談した。

翌日患者は施療病院に入院した。病院の都合で手術は明日の午後三時と云ふ



事に決められた。其の間中、患者は絕えざる疼痛の惡魔と鬪はなければならなかつた。

「こんなにしても痛むなら、エイ勝手にしやがれ。」と患者は餘りの情けなさに自分の足に向つて呟いた。

手術は翌日の午後正三時に行はれた。手術臺に上つて麻醉を掛けられる迄患者は不斷の激痛に惱まされ續けであつた。手術は型の如く行はれて結果良く終了した。丁度手術の濟む頃に患者の麻醉が醒め掛つて來た。手術の後處置が終了し患者の切斷された足は厚く繃帶が卷かれた。全部の處置が滯りなく濟むと患者は車輪の付いたベットに移された。

丁度此の時患者の麻醉が醒めた。患者は何か眩しい物でも見る樣に手術室の天井を不審想にキョロキョロと見廻して居た。看護婦が靜にベットを押して手術室を出ようとすると此の患者が突然呼び止めた。

「鳥渡待つて下さい。手術はもう濟んだのですか？」
「もうスッカリ濟みました。此れから病室に歸るのです。」と看護婦が答へた
「すると私の痛んだ足はもう私には附いては居ないんですね。」
「そうです。」
「其の切つた私の足を見せて貰えないもんでせうか？」
其處で看護婦の一人が今切斷した患者の足を白い大きな膿盆に載せて患者の目の前に持つて行つた。患者は切られた足をジッと見守つた。先刻迄あんなに彼を苦しめた足は血に塗れて慘めに然も行儀よく盆の上に横たはづて居た。其れはもう彼を脅す足ではなくて彼を見棄て去つた一個の生無き物體でしかなかつた。其れを穴の開く程ジッと見詰めて居る中に患者の顴顬の邊りに押へ切れぬ憎惡が浮び上つて靜脈を蛇の紆曲の樣に怒張させた。
「散々俺を惱ましやがつた揭句の果てに未練も無く俺から離れて行きやがつ



て平氣な顏をして居やがるなお蔭で後々迄も俺を飛んだ片輪者にしやがつた。」
アッと云ふ間に患者はット猿臂を延ばしてムズとばかり盆の上の足を掴むと見るや忽ち其れを床の上に叩きつけた。
足はタイル張りの手術場の床に落ちてゴムの塊りの樣に響きの無い音を立てて轉がつた。其して手術臺の下で其の臺に丁度足を掛けて休んで居る樣な格好で寄り掛つて止つた。其の物の人工的には出來無い蒼白い生々しい感觸は其處に落ちた格好からして何となく無氣味でもあり無態でもあり滑稽でもあり又云ふ可からざる凄みと此の世に見掛けざる奇怪さを持つて居た。
其の足に向つて、動いた拍子に酷く痛んだ傷口の痛みに顏を顰めた患者の罵聲が飛んで行つた。
「へン、馬鹿野郎！態ァ見やがれ！」

# 月曜病

或る女學校に通つて居る十八歳になる少女が或る日胃痛を訴へて診察を受けに來た。此の患者は小さい中から始終見て居た患者である。

病氣は過食に依る急性胃加答兒で大した事は無かつたので四日程で全治した。すると十日程經つと又同じ徴候で來院した。今度も大して惡くは無かつたので四五日で全治した。

然るに又十日程經つと又々其の少女が前と全く同じ徴候でやつて來た。餘り同じ病氣を繰り返すのでよく注意して必ず今後過食をしない樣に戒めた。そして何故かかる同じ疾病を短時日に繰り返すか其の原因に就いて調べて見ると、少女は次の樣な話をして呉れた。



「妾しの學校には月曜病と云ふ病氣が季節に關係無く流行して居ます。其れはどう云ふ解かと云ひますと月曜日になると必ず一組に二三人、多い時は四五人も休む人が出來るのです。其れは不思議に月曜日に限つて起る事なので妾達は其れを月曜病と呼んで居ます。」

月曜病と云ふ病名は曾て聞かぬ名ではあり此の少女の學校に限つて散在性に小流行を來すとすると仲々興味ある問題である。成る程云はれて見ると此の少女の病氣も今迄二週間目毎に月曜日に起り、月曜日一日休むと火曜日には登校出來る程度になつて居る。猶、少女の話す續きを傾聽する事にした。

「其の月曜病を先生のよく御解りになる樣に話して見ますと、症狀は皆胃腸の痛みと下痢。診斷は普通の胃腸の病氣と變りは無いのですが、必ず月曜日に起る事。豫後は絶對に可良。豫防法は此れも又絶對にない事です。何故と云へば其の原因が日曜日に家に居ても外に居ても一日中食べてばかり居るからで

す。」と云つたかと思ふと一杯食はされた私の顏を可笑しくて耐らない樣に眺めながら惡戲そうな笑ひを我慢出來ない位に爆發させてサッと診察室を飛び出して行つて了つた。外でクックッと猶笑ひ聲が聞えた。ポカンとして自分は考へた。トンと忘れて居たが、成る程、今の少女は代表的の月曜病患者であつたわいと。



## 蛔蟲

頭痛と腹痛を訴へて來院した三年四ヶ月の少女があつた。熱無く食慾正常、便通一日一二行軟、一週間前に嘔吐一回あり。痙攣等は無い。頭痛も腹痛も四日前から起り特別强く痛むのでも無く痛む時刻も時間も不定である。痛むかと訊けば考へて見てから未だ痛いと云ふ程度である。此の外に輕い咳嗽が稀にある。

診察するに體格中等、咽頭、胸部變化は無い。腹部やや膨慢の氣味あり皮膚は輕度の貧血がある。左右瞳孔の不同を認める。「蛔蟲」の診斷を下して其の由を患兒の母に告げると意外と云ふ面持ちである。

「先生風邪では無いでせうか？此の兒は風邪を引くと直ぐお腹に來る體質ですから。其れに時々咳嗽をしますし、蟲が出來て頭が痛むなんて事もあるんでせうか？」と云ふ。此方の診斷を信用して居ない。婦人雜誌や育兒の本で得た

智識を振り廻して醫者に說明を與へそうな勢ひであつた。

「兎に角、此の藥を呑んで御覽なさい。」と云つて歸した。

翌々日又其の患者が來た。

「先生、やつぱり同じですから、今日は風邪の藥に取り換へて貰ひ度いのです。」と云ふ。

「一昨日の藥は呑ませましたか？」と訊くと、

「子供が餘り進みませんものですから呑んだり呑まなかつたりです。」と云ふ

「そんな事では駄目だ。醫者を信用しなくては病氣は癒らない。云はれた通りの事をして癒らなかつたら又何とでも相談します。藥を指圖通り呑んで又明後日來なさい。」と少しく荒い言葉で云つて歸した。翌々日又其の患者が來た。

「先生、やつぱり妾しの云ふ通りです。此の兒の病氣は風邪なんです。先生に云はれた通りお藥を與へましたが頭痛も腹痛もさつぱり良くなりません。其



の上今朝は鼻がスッカリ詰つて口で呼吸をして居ます。今日こそは風邪の藥に取り換へて下さい。」と云ふ。得々然たる所がある。

併し安魏那もなければ氣管枝炎も無い。其れを說明してやつても一向信用しそうも無い母親である。鼻は全く詰つて口呼吸をして居る。鼻鏡で覗いて見ても變化は無い。然し何だか變であるので母親を說いて近くの耳鼻科の人に一度見て貰ふ事にした。「其の上で藥を上げるから歸りに寄つて貰ひ度い。」と云つて置いた。歸りに其の患者は家に寄らなかつたので夜、耳鼻科の人に電話を掛けてどんな樣子か訊いて見た。すると

「實に珍らしい患者で鼻腔の奥から二十五センチメートルもある蛔蟲を引き擦り出した。餘り珍らしいので其の蛔蟲は取つてあるから見に來て呉れ給へ。鼻の詰るのはスッカリ癒つて歸つて行つたから安心して呉れ給へ。報告しようと思つてた所だつたが遲れて濟まなかつた。」と云ふ返事であつた。

# 旅藝人

東京から三十里程離れた田舍の街の小兒科醫院に水も未だ溫み切らぬ春の初めに旅藝人の夫婦が一人の病兒を抱いて這入つた。

此の夫婦は旅から旅に小さな街を轉々と打つて歩く藝人の夫婦で掛合の滑稽萬歳をして居るらしく其の日も近所の寄席から出も間近いと見えて滑稽な格構の身支度をして兩の腕に寶物の樣に大切そうに病む兒を抱いて來たのである。

病兒は三年八ヶ月の男の子で旅を歩いて居る中に旅先で生んだたつた一人の大切な兒であると云つた。病氣は氣管枝肺炎で相當重態である。醫者は動かしては危險な事を說いて一時快方に向く迄入院でもしてはどうかと勸めて見た。併し其れは到底出來無い相談で其れと云ふのが此の街での興行も今日が打留め



で明晩次の驛路で興行する豫定の一座に加はつて明朝早く此の街を發たなればならない。子供の事は心配であるが自分達夫婦だけ殘るわけには行かない。其れは經濟的にも許されない上に毎日高座に出なければ其の日の飯にも有り附けない位だからと云つて太溜をついて醫者の顏を見た。其の夫婦の深刻な顏は其の着て居るおどけた派手な衣裝に對して凡そ不釣合な對照であつた。

夫婦は藥を持つて又病兒を汚い毛布にくるんで寂しそうに歸つて行つた。

其の晩遲く迄醫院から程遠からぬ場所にある寄席で打ち鳴らす太鼓の音が風に乘つて醫者の耳迄響いて來た。醫者は其れを聞いて、泣き度い樣な心配で一杯の心をジッと押へて高座の上では輕口を叩いて客を笑はせ自分も笑はなければならない夫婦の事を考へて暗然たらざるを得なかつた。

翌朝醫者は起きると二階に上つて寄席の方を眺めて見た。昨日迄高々と立てあつた××一座連中と云ふ三四本の幟りは跡方も無く片附けられて彼等が今

朝早く此の街を發つて行つた事を物語つて居た。醫者は重態の病兒を抱いて心配で氣も潰れる樣な思ひで街から街へ何時終るとも知れぬ浮草の樣な果敢ない旅を續けなければならない夫婦と病兒の身の上を暫くの間深く考へさせられた。



# 診斷書

霜柱が美しい硝子の建物の樣に土の下に並列して居る寒い冬の或る日の事であつた。

請はれて往診した家の患者は三年六ヶ月の男の子で病氣は格魯布性肺炎であつた。相當に擴がつて居る胸部の變化に家の治療の難かしい事を說いて入院を勸めた。

枕元に此の男の子の祖母らしい人が座つて居た。未亡人ででもあるのか頭は短い切髮で黑い着物を着て木像の樣にキチンと端座して私の診察を初めから默つて見詰めて居たが私の申し出でに對して、

「事情が御座いまして入院は出來兼ねますので家で手當をし度いと思ひます」

と云つた。家庭の様子を見れば衣類調度等も贅澤で可成り裕福相に見える。事情と云ふのは經濟的の問題でも無さそうである。

「併し御子さんの病氣は相當重いのであるから成る可くは入院した方がいいと思ひますが。」ともう一度云つて見たが、

「家で手當を致しますから。」と素氣無く拒絶された。

「其れでは家でやる事にして出來るだけの手當をする事にしませう。」

と云つて强心劑の注射をしようとすると、其の婦人が、

「注射はなさらないで下さい。手當の事でしたら仰言つて下さいましたら當方で致しますから、」と云ふ。此處に於て一體此の婦人の正體は何者であるかと云ふ事が疑問になつて自分は思はず、

「貴女は醫者ですか？看護婦ですか？」と訊いて見た。

「私は醫者でも看護婦でもありません。」



「其れなら手當と云つても注射等出來る筈が無いではありませんか？」

「注射をしなくとも病氣が癒ればいいのですから。」

「其れはそうですが其んな都合のいい事に行かなかつた場合はどうしますか？」

「注射や呑藥はしなくとも癒る手當があるのですから大丈夫です。」

婦人は自信ありげに云ふ。

「其の手當と云ふのは一體何なのですか？」

「××式療法をすれば必ず癒ります。私は此れ迄××式療法で幾人も人の生命を助けて居ますから此の兒も助からないと云ふ筈はありません。」

此處に於いて自分も少々啞然としたが少しも物に怖ぢない落ち付いた此の婦人の象篏でもした樣な無表情な二つの瞳を見て居ると無性に腹立たしくもなつて來て、「其んなにいい療法があるのに何故私を呼んだのです？」と云つた。

「病名と病氣の程度を知りたかつたのです。」相手は更に動ぜず明確に冷然とこう云つて退けた。此方は益々腹が立つ。

「醫者の押賣りは出來ませんから私は歸ります。併し吳々も云つて置きますが病氣は仲々重いのですから手當を怠りますと大變な事になりますよ。」と云つて立ち上つた。　其の婦人も落ち付き拂つて今の私の言葉等氣に掛ける樣子もなく玄關迄送つて出た。

其れから氣に掛つて居たが此方から出掛けて行く氣にも成れず向ふから迎ひにも來なかつた。所が五日經つた夕刻に其の家から女中の使ひが來た。取次の者で無く直接自分に話し度いと云ふので會つて見た。　すると此の間見た子供が死んで其の死亡診斷書を慾しいと云つて來たのであつた。

「其の事でしたら御斷りします。私が診た時は重い事は重かつたが助からない程には思はれませんでした。御氣の毒に亡くなつたのは手當を充分に盡さな



かつたからかも知れません。五日前に一度診た切りで其の後の經過を拜見しない自分には只今貴女に死亡診斷書を直ぐ上げる譯には行きません。家に歸つて此の事をよく云つて下さい。」と私はピシリと斷つた。眼鏡を掛けて河豚の樣に白く肥つた其の女中はポカンとして私の顏をマヂマヂと見詰めて居たがやがて不思議相に立ち上つて歸つて行つた。當然吳れるものと思つて來たらしい。

其れ切り其の家からは何とも云つては來なかつた。

# 錯覺

市外の刑務所のある町の開業醫に聞いた話しである。

天の涯迄青く高く澄み渡つた、或る暖かい秋晴れの午後、往診に出ようとして居た其の醫者の家に一人の若い男が擔ぎ込まれた。三十歳には成るまいと思はれる若者は度の強そうな鼈甲椽の眼鏡を掛け蒼白な額に黑い長い髪がバラリと垂れ掛つて居る。容子は瀕死の重症ででもある樣に神經質そうな顏に冷たい汗の玉を滲ませ目は閉ぢて、有るか無きかの靜かな呼吸をして居る。全身は虛脫した樣にグッタリとして手應へが無い。擔ぎ込んだのは附近の農家の若い者で道傍に自轉車と一緒に此の若者が倒れて居たので傍に寄つて見ると小さな聲で「醫者に連れて行つて呉れ。」と云ふので脊負つて來たのだと云ふ。玄關に自



轉車も置いてある。

診察室のベットの上に寢かして兎も角洋服の胸を廣げながら其の醫者は患者に云つた。

「何處か苦しい所がありますか？」すると患者は右手を極く靜かに動かして自分の心臟の部分を指さした。目を細く開いて居る。

「其處が痛いのですか？」と訊くと若者は苦しそうに横に頭を振つた。脈搏を診ると六十しか無い。

「どんな具合なのですか？」猶脈搏を診ながら訊く。

「打たれたのです。」初めて若者が漸く聞き取れる位の小さな聲で返事をした。薄目を開いて居る。

「誰に打たれたのです？」

「監視人に。」連れて來た若い農夫に聞くと丁度刑務所の裏門から一丁程離

れた塀側に倒れて居たと云ふ事である。
「刑務所の監視人にですね。」若者は頷いた。
「どうしてです？何か口論でもしたのですか？」今度は若者は首を横に振つた。苦しそうである。
「では何をして打たれたのです？」
「……突然に……何もしないのに……」
「突然に。何もしないのに。其れは亂暴だ。理由も無しにですか？」若者は再び頷いた。
「本當の張り合ひに、全く豫期もせずに、兩方で。」
「兩方でね。では間違ひだつたのですね。」
「そうです。間違ひだと思ひます。」
「何で打つたのです？」



「ピストルで。」
「エッ！ピストルで、此處を。」今度は醫者の方がスッカリ周章てて若者の片手で押へて居る心臟部をワイシャツの釦も引き千切らんばかりに引き退けて見ると、打たれたと云ふ彈痕も無ければ出血も無い、せめて擦り傷位はありそうなものと胸の邊を溜めつ眇めつ改めて見たが何の異變も無い。
「打たれたのは此處ですか？」醫者は心臟部を指して訊ねた。
「そうです。」若者は息も絶え絶えに蚊の鳴く樣な聲で應へる。醫者は猶首を傾げて傷痕を探した。試みに横を向けて彈丸の通過痕でも無いかと調べたりして見たが何も無い。然も若者は瀕死の狀態にある。甚だ眞面目で醫者を揶揄つて居る樣には見えぬ。再び脈搏を診ると遲脈ではあるが一分間六十の割合で實に正確に整然と打つて居る。
此處に於いて醫者は考へざるを得なくなつた。患者を前にして腕を拱いて暫

くの間沈思默考した。

「如何でせうか？」餘り醫者が默つて居るので患者は心配になつて情け無い調子で訊ねた。其れでも醫者が答へないので更に、

「助かりませうか？」と訊いた。醫者は初めて口を開いた。何だか自分迄此の若者と一緒になつて心配した事が妙に馬鹿々々しくなつて突然笑ひ出すか怒鳴り付けるかし度い氣持になつて來た。

「何を云つてるんです。何處にも傷なんか無いぢやありませんか？」此の醫者の不可解な返事を聞いた若者は急には其の言葉の意味が解り兼ねて突然大きな聲を出した醫者の顏をキョトンとして不安そうに見上げた。

「ピストルで打たれたなんて、何處に傷があるんです。」あれば御目に掛らうぢやないかと言はんばかりに醫者は云ふ。若者も漸く醫者の云ふ言葉の意味が解つたので此れも不思議な事を聞くものかなと云ふ面持で其れでも恐々右の手



で心臟の邊をソッと觸つて其の手を直ぐ目の前に持つて來た。血でも附きはしないかと心配して居るらしい。血も何も勿論附いては居ない。今度は再び右手で觸つて其の指を擦り合せて見た。血の感觸は無い。其處で初めて若者は寢た儘で俯向いて自分の胸を見た。其れから右手で左の胸を二三回撫で廻した。醫者が見て何も無いのだから若者が見ても異狀があるべき筈のものでは無い。遂に若者は上半身を起して起き上つた。

頻りに左の胸の傷痕を探し初めた。併しもう先刻から醫者が散々周章てゝ探して無かつた後であるから其んな傷痕が急に出來よう筈はない。今度は若者が暫く考へ込んで了つた。暫く考へ込んだ末に、

「不思議だ。」

と云つた。此れは全く若者には不思議に思はれたに違ひない。醫者も不思議である。

「一體どうしたのです？」と醫者が訊くと

「どうも不思議だ。」若者は此の言葉を繰り返して醫者の方に向き直つた。

其の動作はもう普通と變りはない。

「どうも不思議です。私が自轉車で桑畑を突つ切つて刑務所の裏門の前を通ると、其の門の前で一人の監視人が日向にピストルを出して其の掃除をして居ました。私が丁度其處を通る時に其の監視人はピカピカ光つたピストルを丁度私の方に向けて射つ格好をして居ました。危いなア。と私は思つてペタルに力を入れて其の前を風の樣に通り過ぎました。監視人が未だ私に狙ひを附けて引金に手を掛けて居るのを私は見ませんが直感で私の脊中に感じて居ました。すると突然、私は、バーン！　と云ふ激しい銃聲を耳にしました。其れは私の鼓膜をビリビリと慄はした位激しい音でした。其の音と同時に私は私の心臟に燒き金を突き入れられた樣な强い痛みを覺えました。やられたナ。と私は思ひま



した。故意では無からう。誤つて發射して了つたんだらう。と私は其の時考へる餘裕がありました。私の身體から力と云ふ力は全部脫け出して自轉車に乘つた儘、ドーンと道傍に倒れました。此の人が私を此處に連れて來て呉れる迄三十分位私は動かずに倒れて居ました。動かずにでは無くて動かうとしても動く事が出來なかつたのです。後を振り返つて自分を射つた監視人を見る事も出來ず聲を出して救ひを呼ぶ事も出來ませんでした。何故私は射たれたんだらう。そして何故私を射つた監視人は直ぐ私の傍に走り寄つては來ないのだらう。と私は考へながらジッと倒れて居ました。自分から動いたら死ぬ樣な氣がしました。胸の擊たれた心臟の邊をタラリタラリと血が傳はつて流れるのを見ずに感じました。洋服の下で血が見る見るワイシャツを眞紅に染めて行くのも感じました。氣分が良くなつて天が何處迄も何處迄も青く透明に廣がつて其の中に自分が溶け込んで行く樣な氣がしました。胸の傷はもう少しも痛みはせず却つて

スガスガしいいゝ氣持でした。私は、此れはもう死ぬのだな。と思ひました。其處に此の人が來て私を起して呉れました。私は無意識に、醫者に連れてつて呉れ。と云ひました。今見ると私は何處にも傷を受けては居ません。先刻の彼の音と心臓の痛みとは彼の監視人の撃つたピストルの爲めでは無かつたのでせうか？そうそう、も一つ忘れて居ましたがピストルの音がした時に私の自轉車の泥除けにビーンと一つ、小石が跳ね上つて私の左の手首に當りました。私の今云つた事は全部決して嘘ではありません。私は夢でも見て居たのでせうか？」

自轉車を調べると後輪のタイヤがパンクして居た。若者が見た刑務所の監視人のピストルの恐怖と丁度パンクした自轉車のタイヤの音と其の時飛び上つて若者の手に當つた小石と突然起つた心臓の疼痛とが偶然一緒に起つて此の混み入つた錯覺を起させたものであらう。

やがて元氣を取り戻して若者は農夫と一緒に醫者の門を出て行つた。



# 戰死

内科の醫者が居た。

此の醫者は學生の頃、軍醫を志願したが體格が惡い爲めに撥ねられて普通の開業醫に成つた。軍隊で撥ねられる位であるから無論いゝ身體では無かつた。自分の身體の虚弱な事を常に痛感して内科の中でも結核を標榜して研究と診療を忘らなかつた。

結核科となると自然相手が結核患者ばかりである。中には可成り進行した傳染性患者も居る。危險な事は此の上無く危險なのであるが其の醫者は自分にも多少其の素因のある事を認めて居たので平氣で此等の患者に接して居た。平氣ではあるが決して傳染に對する注意を疎かにして居るわけでは無かつた。注意

の上にも注意して自分の身體も患者と同様に養生して行つたのである。

が時々避け得られない原因から風邪を引いたり咽喉を痛めたりする事があつた。すると此の醫者は嚴格な安靜療法を行つて直きに恢復した。恢復すると再び立ち上つて診療に從事した。元々强い身體では無かつたから輕い風邪は屢〻繰り返して引いた。が併し何時も大事に至らずして良くなつて了ふのであつた。其れは此の醫者が病中は少しも身體に無理をしないからでもあつた。

風邪を引く度に痰の中に血點や血線を混じた。時には小喀血をする事もあつた。こうして此の醫者は休む度に健康を蝕まれて行く如き感があつたので心配した家人や醫者の友人達が一時開業を止めるか少くとも結核と異ふ科に轉向してはどうかと熱心に勸める事も一切では無かつた。醫者は笑つて肯じなかつた。

細い身體で良く彼れだけの仕事に耐へられるものだと、友人達が感心する程、數年間此の醫者は結核患者ばかりを相手に暮した。が或る時此の醫者が大喀血



をした。洗面器に一杯になる程の喀血であつた。友人の醫者が驅け付けて手當をした。が不思議な位喀血した當の醫者は平靜で少しも取り亂した樣子等は無かつた。

病氣が大體落ち付いた樣に見えた時、此の醫者に極く親しい、友人の醫者は、此の醫者の家族と一緒に再び健康の爲めに開業を一時止めたらどうかと勸めて見た。すると醫者は笑つて次の樣に答へた。

「僕は身體が弱いので小さい時からの志望の軍醫にはとう〳〵成れなかつた。其處で僕は街の開業醫になつて結核と云ふ敵を相手に一生を鬪ひ、同時に僕と同じ病氣の患者達、つまり戰友と一緒に彼等を引き連れて勇敢に進軍しようと決心して居るのだ。僕の戰友達は或る者は傷き、或る者は斃れる。僕も幾度か小喀血をしたり寢込んだりする。其れは僕は小さな負傷だと思つて居る。小さな負傷は癒れば再び立ち上る。立ち上つて又進軍するのだ。醫者が結核を相手

に其等の患者を診療して行くと云ふ事は武士で云へば戰場にあると同樣だと考へて居る。其の戰場で負傷するのも仕方の無い事だし運惡く死んだとしても僕は悔ゆる所か名譽とさへ考へて居る。だから僕は今度も決して勇氣を挫かれはしない積りだ。運が良くて再び起つ事が出來れば再び結核を相手に鬪つて行くし、不幸にして死ねば自分の思ふ儘に働いて死んだのだから本望ではないか。」



## 車

東京から十八里程距つた田舍で永年開業して居る內科醫に聞いた話である。

或る晩遲く往診の依賴を受けた。其の日は患者が少なかつたので其の醫者は書籍等を繙いて未だ其の時は寢ては居なかつた。前から見て居る患家であるので醫者は大體の容體を訊いて直ぐに行くからと云つて使の者を歸した。患者は六十二歳になる老婆で五年も前から肝臟癌の診斷を付けて家人にも注意して居た患者であつた。併し本人には其んな事は知らせて無かつたので一向に平氣で平常は元氣過ぎる位達者で暮して居た。併し此の頃は僅微の進行を續けて居た疾病の爲めと追々に老ひて行く年齡の爲めにメツキリと弱くなつて居た。

車夫を起して醫者は車上の人となつた。晩秋の夜であつたが其の夜は嫌にムシムシと生暖かく曇つた空には星の影も見えなかつた。田舍の眞夜中は全く靜

かなものである。街ではあるが家々は戸を閉め切つて所々にある街燈が黄色い淡い圓光を放つて居る外街全體が眞暗にシンと眠り切つて居る樣に見えた。患者の家は街を外れて相當離れた所にある舊家であつた。通りには車の邪魔をする物は何一つ無い。車夫は默つて夜中の街を走つて行つた。

走り出して二三町行くと車夫は可成りのスピードを出し初めた。相當足の早い車夫であるので何時も走り出すと追々に速力を增すのであるが今夜のスピードは何時もよりズッと速い事に車上の醫者は氣が付いた。夜中に起したので腹を立てて居るのかも知れぬ。と醫者は考へて默つて居た。四五丁走るとスピードは益々加つた。如何に人の無い街とは云へ此んなに速く走つては危險である。何時何處の四角から人が出て來ないとも限ら無い。夜警の巡査に衝突したり流しの按摩を轢き倒したりしては大變である。眞夜中に迎ひに來る位であるから患者の容態は惡いには違ひ無いが此んなに夢中になつて急がなければならぬと



云ふ事は無い。確かに今夜の走り方は異狀である。こう考へたので醫者は車上から車夫に向つて聲を掛け樣とした。すると車夫は急に力を入れて速力を緩めた。グッと緩めた。そして走りながら後を向いて車の後を透して見た。

其れから又走り出した。一二丁行くと又速くなり出した。すると車夫は再びグッと自分から力を入れて車を止めた。梶棒を握つた儘先刻の樣に車の後を棒鼻に付けた提灯の光りで透して見て居た。

「どうかしたかね？」醫者は少しく不安になつて車の上から車夫に聲を掛けた。

「イヤ、何でもありませんが。車が嫌にハズムんで。誰かこう後ろから押してる樣な氣がするんで。」と車夫は云つた。車上の醫者はゾッとした。何かしら無氣味な感覺が脊筋を走つた樣に思つた。

「そんな馬鹿な事は無いだらう。」と半ば自分に云ひ聞かせる樣に强い口調で

車夫の言葉を否定した。

「へえ。」車夫は再び氣を取り直して前を向いて走り出した。車上の醫者は氣が氣では無く胸の動悸は早鐘を亂打する様に鳴り響いた。何時早くなり出すかと思ふと居ても立つても居られない程氣味が惡かつた。

二三丁走ると車夫が突然車を止めた。その爲めに醫者は危く、ワッと悲鳴を上げそうになつた位驚ろかされた。そして、

「ど、ど、どうした？」と息を彈ませて突鳴る様に訊いた。

「どうも今晩は變です。下り坂でも無えのに嫌に車が突つかかつて來て。チョッと車を調べますから。」車夫はこう云つて提灯を梶棒から外して車の後ろに廻つて車輪の具合を調べ初めた。提灯の光りに車夫の大きな頭の影が動く度にユラユラ怪物の様に搖れて車の幌に映つた。醫者は非常に心細くなつて來た。車の中でワクワクしながら車の調べの終るのを待つて居た。



「どうした？何處か故障でもあつたか？」

「いや、何んとも無えのです。どうも變ですよ今夜は。」車夫は前の方に廻つて提灯を梶棒に取り付けた。車夫も如何にも不審の思持である。乘つて居る醫者は猶氣味が惡い。後ろから何か押す者があるとすれば車夫より醫者の方が近いのである。醫者の後ろを押して居るのである。と考へると猶更脊筋から冷水を浴びせられた様な氣がした。

車夫は再び梶棒を上げた。其れから後は殆んど夢中で走り續けて目指す患者の家の大きな土塀の中に走り込む迄、醫者も車夫も何物かに追ひ立てられる様に殆んど生きた空が無い程の怖ろしい思ひをした。

それでも患家に付くとホッとした。入口に煌々と燈を輝かせて幾人もの人が醫者を迎へて呉れた。大急ぎで病室に通ると彼んなに車を飛ばし又此んなに大勢に迎へられた甲斐も無く患者は今息を引き取つたと云ふ所であつた。醫者は

其れでも型の通り診察する事は診察した。

「病人は先生を隨分御待ちして居たのでしたがね。」と枕元に座つて居た此の家の主人が殘念想に云つた。

「何しろ急な事なので此んなに早く死ぬとは思ひもよりませんでした。惡いとなれば晝の中に御願ひするのでしたが、今日は常より元氣な位でしたものですから。」

醫者はお茶を一杯飲むと悔みを云つて立ち上つた。何時迄も死人の傍に居るわけにも行かなかつた。

再び車上の人となつて今來た道を引き返した。歸りの道こそもつと急げばいいのに今度の車の速度は實に遲々たるものであつた。車夫を見ると決して殊更にデレデレ曳いて居るわけでは無く一生懸命曳いて居る樣子であるが恐ろしく車の運びは緩かつた。宛で力の抜けた人が重い人を載せて曳いて居る樣であつ



た。併し車夫も默々、醫者も默々として何事も語らなかつた。何か云へば恐ろしい樣な氣がしたし又相手の口から無氣味な返事が飛び出して來るかも知れぬ事を怖れて二人共石の樣に默つて居た。車上の醫者は强直する程に身を縮めて息を詰め、曳く車夫は額から迸る汗に帽子を濡らして一生懸命に兩手兩足に力を入れて居た。

そうして兎も角漸くの事で家に辿り付くと醫者も車夫も氣拔のした人の樣にグッタリと疲れてお互に物も云はずに床の中に潜り込んで了つた。

翌朝、車夫は醫者に向つて此んな事を云つた。

「私は昨夜位、氣味の惡い晩はありませんでした。往きには後ろから急げ急げと誰れかが車を押して居る樣な氣がして幾ら梶棒を押さへても自然に車が前に飛び出して來ました。車を調べても何の變哲も無えのです。往診先で又よく調べましたが矢張り何の變りも無えのです。所が今度復りの車の重かつた事は

幾ら力を入れても仲々車が前に出ねえのです。凡そ五十貫もある大荷物でも載せた様に幾ら曳いてもチッとも渉取らねえ。私は載つて居るのが先生ぢや無くて大入道か大きな石の地藏さんででもありやしねえかと思ふと一そ後ろを振り返つて見る氣にはとてもなれませんでしたよ。冷汗は後から後から出る。膝頭はガクガクして力が拔けて來る。その上何時も世間話しをなさる先生は本當の石地藏の様に默りこくつて一言も仰言らねえのですから生きた空はありませんでしたよ。何遍も車をうつちやつて逃げ様かとも思ひましたが逃げると忽ち摑まる様な氣がして逃げる事もならず彼んな恐ろしい思ひをした事はありませんせ。」



# 椿

非常に椿を愛好して居る老人があつた。庭に一本の椿を植え朝に夕に其の手入れを怠らず我が子の様に愛しみ育んで居た。此の庭の椿の外にも鉢植えの數本の椿を常に離さず愛で賞して居た。

二人ある子供もそれぞれ學校を出て職に携り妻帶して中にも長男にはもう子供迄あるし自分自身も隱居の身として働かずに餘生を樂しむ財産も樂にあつたので何一つ心に懸る心配とても無く靜かに自分の好む椿の木を愛して生活して居た幸福な老人であつた。酒も煙草も喫まなかつた。只樂しみは椿を愛する事だけであつた。椿も此の老人の暖い愛に應へる如く毎年固い蕾を持つて冬を越し春になればフックラとした蕾を破つて美しい花を咲かせて己の主人の眼を限り無く樂しませた。老人は毎日椿を望めて暮した。日の當る縁側に出てお茶を

呑み乍ら椿の花を見て居る事がよくあつた。害蟲の驅除も肥料の土も怠らず世話をするのが老人の唯一の道樂であつた。

此の老人が或る年の秋、急性肺炎を起してポックリと死んで了つた。年齢は六十八歳であつたが苦しみもせず長くも寢ずに死んで了つた。病床には好きな椿の鉢植えが飾られてあつたのであるが其れを眺めて寢て居たのは三日でしかなかつた。

此の老人は此の家の定められた墓地に葬られたが息子達の心遣りから老人が生前愛好して居た庭の椿は葬式が濟んで數日經つた後に老人の墓所に移し植えられた。

墓地は朝から日暮迄日がよく當る南向きの小高い所にあつた。此處に移し植えられてから椿は土地の肥えて居る爲めかスクスクと延び初めた。息子達が墓詣りをする度に椿の幹は太くなり葉は磨き上げた樣に艶やかに輝き枝は四方に



廣がり木の肌は白くスベスベに美しくなつて行つた。其れは丁度老人の死後、此の老人の靈が此の椿に吹き込まれたかの如く美事な成長をした。

數年の後息子達が老人の墓に詣でる時には遠くから墓地の位置が解る位に椿は大木となつて天に聳えて居た。

# 肺臓ヂストマ病

附屬病院の施療外來に大學を卒業した醫者の紹介狀を持つて、或る日雲つくばかりの大男が診察を受けに來た。

二十八歳になる朝鮮の人で主訴は血痰である。血痰は數年の間引き續いてあり本人は一向氣にも留めて居ないが、職業が土工で同僚から嫌惡される爲めに醫療を受けに來たのであつた。

患者は顏面稍〻蒼白、仕事の途中で時に輕微の呼吸困難を呈する。喘鳴を聞き、右の上葉に中水泡音が少數ある。體格は疲せては居るが筋肉が引き締まり美事な物であつた。

喀痰は暗赤色の血液を混じ鏡檢の結果、多數の膿球、シャルコー氏結晶及びヂストマの卵子を發見した。立派な肺臓ヂストマ病である。



丁度幸ひな事に再來週のN内科の臨牀講義に肺ヂストマ病が出るので患者に勸めて入院をさせる事にした入院して困る職業でもなし誰に相談すると云つても自分一人が毎日を食つて行く心配さへすればいい獨り者の事とて直ぐ其の儘其の日から入院して了つた。

當人にして見れば自分では何の苦痛もなし家に歸つて働くより餘程樂だし第一今迄に既に經驗した事もない美しい部屋でこんな奇麗なベットに埋まつて白い服の看護婦に面倒を見て貰つて無料で治療を受けると云ふ突然降つて湧いた幸福に暫くの間は間ごついた樣な樣子であつた。

若い醫局員の手で種々の檢査物の準備も整ひ委しい病歷も作成されて、金曜日の臨牀講義の日迄約二週間患者は天國にある樣な生活をした。

臨牀講義が濟むと患者は輕快と云ふ豫後で退院させられた。

其の年も暮れて翌年の二月の末、新らしい醫者が社會に出る卒業試驗が初ま

る頃、此の肺臓ヂストマ病の患者が又フラリと附屬病院のK内科の外來に現れた。

其の後の病狀は依然として變りはなかつた。がK教授が診察の結果、卒業の臨牀試驗の材料には御誂向きなので早速入院させる事にした。勿論患者に異存のあらう筈はなく喜んで其の日から入院した。

かうして此の患者は學生の臨牀試驗の材料となつて二週間を病院の奇麗な部屋の中で暢氣に暮して行つた。

其の年の十月の初め又同じ患者が病院を訪れて古い醫局員を苦笑させた。其の時も正しく呼吸器系疾患の講義の行はれて居た際なので今度は患者はT内科の講義の材料となつて矢張り一週間餘りの入院生活を樂しんで退院して行つた。こうなると此の病氣を持つて居ると云ふ事が此の男の仕合せで此れあるが爲めに時々無料で食ふ心配もなしに手足を伸ばして生活出來るのであつた。で



あるから此の患者にして見れば病氣を癒して貰ふ事は却つて有難迷惑で或る期間藥や注射の犧牲を忍べば樂が出來ると云ふのが目的なのである。丁度いい事には患者の希望通り此の病氣の豫後が殆んど不良で生命には別條はないが治癒する事も困難である。此れが此の男の取り柄で病氣が自分を養つて呉れる結果となるので病氣をそう粗末に取り扱ふ事も出來ぬし、そう矢鱈に癒して貰つても困るのである。

翌年の臨牀試驗の時は此の患者は附屬病院を訪問しなかつた。醫局の人が誰もが此の患者の事は忘れて居た。が其の中の一人が、

「今年は朝鮮の肺ヂストマは來ないね。」

と云つたので此の患者を知つて居る人達は皆彼を思ひ出して暫くの間は其の患者の話しに花が咲いた。

六月頃に又其の患者が病院に遺つて來た。此の時は何の内科の講義にも關係

のなかつた時なので入院はさせられなかつたが早速其の日のポリクリニックに出された。

「どうして臨牀試驗の時來なかつたのか？」と古い醫局員が半ば揶揄的に訊ねると當人は至極眞面目な顏をして答へた。

「ボク（僕）センチツ（先日）はベチ（別）のタイカク（大學）のビョイン（病院）に行つてた。ボク（僕）タンタン（段々）忙しい。此處濟んタらコント（今度）岡山の方に行く。」

歸る時患者は又、

「ボク（僕）のビョキ（病氣）癒らないがカラタ（身體）にベチチョウ（別條）ないから安心。ビョイン（病院）に這入る事、ボク（僕）のホヨ、ホヨ。」と云つて歸つて行つた。「ホヨ」と云ふのは後で考へて見たのだが保養の事かも知れぬ。



## 診察時計

眞白い四角な明るい部屋の中で粗末な椅子にノンビリと座つてボッボッと私に話をして呉れた人がある。

「近來我々醫者仲間の誤診問題が大分喧しく社會の人に云はれて居る。此れは我々開業醫に取つては實に重大な問題であるばかりで無く一方患者に取つても忽せに出來ぬ事であるのは醫者は其の爲めに生活を脅され患者は生命を犧牲にするのであるから無理からぬ事と云はなければならない。併し其れに對して簡單な對策が私にある。其れは何であるかと云ふに實に簡單極まる事で醫者が誤診しなければいいと云ふ事である。醫者が誤診しないと云ふ事は云ふべくして易く行ふに難い。醫者も人間である以上誤診もあるのは當然ではないかと君は云はれるかも知れない。正に其の通りである。併し現今は神樣の時代では無く

て科學の時代である。病氣を癒すのは祈禱では無くて最新の治療ではないか？

見給へ、私の此の時計さへあれば其んなうるさい問題の起らう筈は無い。此の時計は今私は假に「診察時計」と名付けて置くが此れが出來上つた迄の經緯に付いて鳥渡御話して見るのも無駄では無からうと思ふ。まア急がなければユックリ聞いて呉れ給へ。

此の時計は私が醫者の學校を出た頃に發明した物だが此の時計さへあれば何時何處へ行つたつてピクともする事ではない。例へば一人の患者を診察する時に既往症を訊きながら上のネヂを廻せばいいのである。熱のある病氣であれば此のネヂを「熱」の所迄廻せば熱のある病氣は全部出る事になつて居る。其の熱も弛張熱とか繫留熱とか別けてあるから疾病の種類も一目瞭然と解るのである。次に下痢があればネヂを下痢の所迄廻すと下痢のある病名が全部出る。次は嘔吐、次は咳嗽と各既往症に就いて一一ネヂを廻した後に主徵とする所の症



狀群から一つの病名が最後に殘る樣になつて居る。即ち熱のある病氣は多いが熱があつて孰れかに疼痛のある病氣となると大分範圍が狹くなる。又更に熱と或る部分の疼痛と嘔氣があると云ふ事になれば更に範圍は狹まるわけである。こうして訴へる所の症狀から篩ひ落して行つた後には嫌でも一つの病名が殘る事になる。時としてこうして篩ひ落して行つた病名がネヂを卷く時に二つ乃至三つ並んで表れる事がある。其んな時には現症をよく見て更にネヂを卷けば嫌でも病名が出る樣になつて居る。つまり、此れ此れの病氣の中で此れ此れの徵候のある病氣と云へば必ず文字盤の上に一つの病名が表れる仕掛なのである。其の代り其の出た病名は其の病氣の確實な診斷であつて萬が一つにも間違ひは無い。間違ひの無い樣に迄作り上げるのに私は外の總べての仕事を放棄して丸三年と三月此の「診察時計」の研究に沒頭したのである。此の時計を作る動機は學校を出て直ぐに患者を見る時の不安から學生時代によくカンニングをして

居た生徒の事を考へ出して得たヒントで初めたので一名カンニングウオッチともマヂックウオッチとも名付けて居る。私は此れを世界に誇り得る大發明と考へて居る。私は此れを使ひ初めてから十年間一度として誤診と云ふ事をした事は無い。堂々たる博士連が六人も寄つて診斷の附かなかつた難症を一目見ただけで診察もせずにピタリと云ひ當てて世人を驚嘆させた事もある。別に私に天才的頭腦があるわけでは無い。皆此の時計のお蔭である。又或る時は半年も病名の判らなかつた病人に數分にして確定的診斷を與へ剩へ數日にして全治せしめた經驗もある。此の時計の世界的發明である所以である。

私は今此の時計の診斷表を各國語に飜譯して居る。そして全世界の醫學界に發表し全世界の人類の爲めに貢獻する心算である。其の爲めに此の時計も日本名は「診察時計」と名付け特許申請中であるが、其の特許は未だに下らない。それは無理も無い事で恐らくは私自身の考へでは其の特許は永久に下るまいと



考へて居る。何しろ此れが賣り出されれば素人でも容易に診斷がつき醫者と同様な事が出來るわけであるから政府としても此れの特許許可に就いては幾度か會議を重ね熟慮を經ては居るものの其の可否には未だに確たる答へが出來ないので其れは私としても重々察して居るから決して無理とは思つて居ない。此んな世界的發明となればそう二年や三年で輕々に斷定を下す事の不可能な事は當然な事である。特許が下りても下りなくとも私の研究は止める事ではないので續いて私は次の方法で疾病の豫後を云ひ當てる發明を完成した。其れは症狀の輕重をプロセントで表現する方法で其れらの症狀のプロセントの總和で轉歸を明示し合せて其の治癒又は死亡迄に要する日數をも數字で表し得るのである。其れを作り上げるのに私は又外の總べての仕事を放棄して三年と三月掛つて居る。

今云つた様に政府で特許を下し澁つては居るが私の發明が一日世に出る事が

遲れれば一日世界人類は大いなる損失を受ける事になるので特許如何に拘らず私は時計工場に依賴して大大的に此の診察時計の製作に着手する手筈になつて居る。其れは金と銀とプラチナの三種で內容は勿論同一の物であるが十八ヶ國の言葉に飜譯してある爲め製作も大變な費用と手數を要する。丁度其の資本の事から此處の病院の院長に會見して色々の話しをして居る中に、院長は私の才能を見込んで是非此の病院の副院長にとの希望默し難く私としては次の研究である「治療時計」の仕事が未だ骨子だけしか纒つて居ないので再三御斷りはして見たが遂に斷り切れずに招聘されて來たわけである。

「其の「診察時計」が御覽になり度ければ此れですからどうぞ御覽下さい。」

こう云つてポケットから恭々しく取り出して私に渡された時計を手に取つて見ると、昔の大型の銀時計で文字盤には一つも數字は無く無數の細かい點がべンの先でトントン叩いて付けた樣に付いて居た。氣を付けて見ても其れが文字



の樣には見えなかつた。試みに上のネヂを卷くと其の文字盤がクルクル動く樣になつて居た。

眞白い部屋の窓には狂人の逃亡を防ぐ太い鐵格子が穿められてあつて、△△精神病院の一室は珍らしく物靜かな午後であつた。

## 跋

診療の余暇を見ては書き綴つた物語が大分溜つた。此所いらで一先づ區切りをつけて見たいと思つて一冊の本にはして見たが此の物語は此れで終りでは無い。書き溜れば續編も續々編も出す考へで居る。

御斷りして置き度いのは『診療簿から拾つた話』と云ふ題名で此れは物語の材料を拾つたので、事實をその儘書いたのではない。

最後にこの本を世に出して下すつた診療社の脇主幹の御骨折を深く感謝して筆を擱く。

昭和十二年二月廿五日印刷
昭和十二年三月十三日發行　〔定價貳圓〕

著作者　竹村猛壽

東京市芝區田村町三丁目五番地
發行兼印刷者　脇長男

東京市芝區田村町三丁目五番地
印刷所　診療社印刷部

不許複製

發行所　東京市芝區田村町三の五
（振替東京六〇〇五三番）　診療社出版部

60
1451

終